

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.68
February 2018

フクロウ

フクロウには、「シマフクロウ」や「メンフクロウ」など、たくさんの種類がありますが、この写真のフクロウは「フクロウ」という名前です。「フクロウ」の中でも北の地方のものを亜種として区別する場合、エゾフクロウといいます。北海道全域に生息し、樹洞(じゅどう、太い木にできた穴)に暮らします。夜行性ですが、冬は市街地近くの開けた田園地帯に飛んでくることもあり、出会える確率が高まります。

撮影: 國本 昌秀

植物の名前の裏側



井上氏が藻岩山で採集したモイワラン標本とスケッチ
(北海道大学総合博物館収蔵)

新種発表の根拠となったモイワランの標本
(国立科学博物館収蔵)



テングクワガタ、マムシグサ、キツネノボタン、ブタクサ、マイヅルソウ・・・全て植物の名前ですが、昆虫のクワガタムシ、蛇のママシ、哺乳類のキツネ、ブタ、鳥類のツルが名前に入っています。植物の名前は基本的には形や色・模様の特長を表現しています。時には発見者名や発見地名を入れたり、人間の利用方法や言い伝えから名付けられたりすることもあります。まさに、「名は体を表す」といえるでしょう。

の思いが込められています。生き物は1種につき2つの名前を持ち、世界共通の名前である学名(ラテン語。アルファベットで書く。)と、日本だけで通用する名前である和名(片仮名で書く。)があります。生き物の名前にも名付け親がいて、誰が名付け親かは学名から分かるようになっています。例えば、ヒマワリの学名は *Helianthus annuus* L. でL.が命名者であるリンネ(昔の有名な植物分類学者)の略号です。有名な学者だけでなく、その生き物を研究して発表すれば誰もが命名者になることができます。新種ではありませんが、私も学生時代に研究した植物に名前を付けたことがあります(波線部が命名者)。その名は、「*Nuphar pumila* (Timm) DC. var. *ozeensis* H.Hara f. *rubro-ovaria* Koji Ito ex Hideki Takahashi, M.Yamazaki et J.Sasaki」です。といわれても、読めないし、意味が分からないし、さっぱり興味が湧かないと思います。



マムシグサ



キクバクワガタ

私たち人間は一人一人に名前が与えられ、そこには「名前のような人になってほしい」という家族

でも、「北海道の雨竜沼湿原で見つかったから、和名がウリュウコウホネです」といわれると、一

気に親しみが湧くかと思います。

和名には命名者が並べて書かれることはありません。学名は国際ルールにのっとった論文発表をしなくては



ウリュウコウホネ

「正式な名前」として認められませんが、和名の発表には特にルールはありません。

そのため、学名・和名の由縁を探っていくと、意外な不一致もあります。その例として、札幌の藻岩山の地名をもらったモイワランの歴史をたどってみましょう。

まず、昭和初期に札幌で井上藤二氏いのうえとうじが標本を採集し、1956年にサイハイランの変種と同定して「和名モイワランとする」と学術雑誌に書いています。その後、長らく井上氏の採集した標本は行

方不明となります。その間にモイワランと同じ特徴の植物が青森県下北半島で発見され、遊川ゆかわ知久博士ともひさ(国立科学博物館)が1999年に新種として発表し、学名が変更になりました。本拠地が札幌から青森に移ったようで、ちょっと残念な気がします。

しかし、モイワランは変種から種にランクアップし、札幌産の標本(東京大学収蔵)も、種の基準となる標本の一つとして指定されているので、札幌がモイワランのいわば聖地であることは変わりありません。

ところで、行方不明だった井上氏の標本は、北海道大学の植物標本庫に“眠っていた”のを、ボランティアが整理中に“発掘”したそうです。

名前の裏側にはこんな人間の営みがあるのだと思うと、博物館で標本資料を見る目も変わってくるのかな、と思います。

文・写真／学芸員 山崎 真実

ホット
コラム

展示室につき
来るたび変わる？博物館

○月×日 展示解説員 前田亜沙美

センターも移転してからまもなく丸二年になり、常連さんもたくさん増えました。

センターの小さなアイドル三歳のしゅんすけ君とりゅういち君は人や動物の骨が大好きで、ほぼ毎日展示室の骨格標本を見に来てくれます。

隣の平岸高台小学校の子もたちも最初はプラ板キーホルダーや折り紙などのミニワークシヨップが楽しくて来ていましたが、何度もセンターを訪れる度に、化石や植物に触れて、自然史に興味を持つてくれる子どもたちが増えました。

その中でも、一年生のそうたろう君は化石クリーニングのボランティアアさんとの交流がきっかけで、今は「将来は化石を掘る人になりたい!」と言っています。

最初はセンターに興味がなくとも、何度も足を運ぶことによつていろいろな興味や好奇心が出てくるのはセンター冥利みょうりに尽きます。

そして移転前から長年通っているけいた君は現在中学三年生で、地学

オリンピックにも出場するほどの将来有望な実力派です。今でも学業の忙しい合間を縫つて、化石や鉱石の論文を調べています。

そうやって博物館が敷居の高い場所ではなく、誰もがそれぞれ好きなことを気軽に学べる場所だということを知ってもらい、これから子どもたちが素敵な博士や研究者になるための手助けになればいいなと思つてるので、いつでも来館してくださいね。もちろん研究者や博士以外のみんなの夢も応援しますよ!



コレクションクエスト

ふだん公開していない収蔵物を紹介します。さあ、標本の世界を冒険だ！

タカハシホタテはおよそ700万年前の北海道に出現し、4~500万年前にはカムチャッカから東北日本まで分布を広げましたが、およそ100万年前に地球上から姿を消した、いわば

北海道の新第三紀を代表する貝化石です。私たちが普段目にするホタテガイに比べると、成貝の殻が厚く、右殻が特に大きく膨らむという特徴があります。

この標本は、生まれて間もないものから10年以上、15cmを超えるものまで、左右両殻揃って採取されており、タカハシホタテがどのように成長し、生活していたのかを示す貴重なコレクションです。



文・写真/学芸員 古沢 仁 「タカハシホタテ成長過程標本」SMAC3229(田中三郎氏寄贈)

File No.4
チカホに
博物館活動センターが
とびだしました！

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、様々な活動を紹介します。

2018年1月、札幌駅前地下歩行空間にて「とびだす博物館inチカホ」を開催しました。期間中は、当センターの学芸員やスタッフ、展示物が会場に「とびだし」、当センターの活動をはじめ、研究中の小金湯産クジラ化石や札幌の植物などについてお伝えしました。会場には昨年末に完成したばかりのクジラ化石の頭部のレプリカ標本も登場し、子どもから大人まで、かつて札幌の海を泳いでいたクジラの大きさにびっくり！レプリカ作りや、骨格組み立て体験などのワークショップや標本の紹介を通して、キラキラした笑顔にいっぱい出会えました。



サッポロカイギュウの骨格標本をみんなで組み立てたよ！

博物館活動センターではこれからもさまざまな形で活動をお伝えしていきます。今年も、知識の宝箱を開けに、たくさんの方に来館してもらえますように。



交通アクセス

- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
- 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター infomation

入館料：無料
開館日：火曜～土曜 開館時間：10時～17時
休館日：日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス
二次元コード



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <http://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュージアムは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。